



京都市文化観光資源保護財団

会報

No.16



もくじ

文化財の紹介

円山の皆如院

京都工芸繊維大学教授 中村 昌生 P 4～5

シリーズまもる①⑥京都北白川の伝統行事、芸能の保存と伝承

北白川伝統文化保存会長 内田福太郎 P 6～7

会員だより P 8～10

保護財団の活動 P 10～12

会報題字 理事長 佐伯 勇

会 報

No.16

52. 1. 1

編集・発行

財団
法人

京都市文化観光資源保護財団

京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内
〒606 電話 075-771-6051

——日本のふるさと・日本の宝——

◆京の緑と文化遺産をまもりましょう◆

あなたも文化観光資源の保護者として
金額の多少にかかわらずご協力をお願いします

- 京都市文化観光資源保護財団は、京都の貴重な文化財、伝統行事・芸能並びに文化財周辺の景観を守るために広く国民各層の方々のご協力、ご指導によって設立しました。
- ご協力いただいた寄附金はすべて、基金として大切に管理するとともにその果実はすべて、文化観光資源の保護事業にあてられています。（基金は京都市が責任をもって管理します。）
- 寄附は、所定の寄附金申込書により、財団事務局までお申し込み願うか、現金書留郵便または、所定の寄附金払込書により、京都市指定金融機関及び京都市収納代理金融機関へお払い込みください。

◎お問い合わせは

京都市左京区岡崎最勝寺町 京都会館内 〒606 電話075-771-6051

財団法人 京都市文化観光資源保護財団事務局まで

ご協力ありがとうございました

寄附者芳名録(敬称略)

51.10.1~12.10



寄附金取扱いを行なっている
某金融機関

—個人の部—

- 〔特別会員〕 並川 康夫 〈10万円〉
- 〔普通会員〕 *田中 正男 〈3万6千5百円〉
- 福田 哲也 〈2万円〉
- 〔賛助員〕 *本田善一郎 〈1万9千円〉
- *前田 英 〈1万1千円〉
- *井田喜智郎 〈9千5百円〉
- *松本善次郎 〈8千円〉
- *堀池 嘉一 〈7千円〉
- *加藤 雅一 〈6千円〉

(*印は追加寄附の篤志者、寄附金額は累計額)

- *澤田 周一 〈4千円〉
- *高木 春代 〈3千5百円〉
- *澤田 浅子 〈3千3百円〉
- *吉本 明子 〈2千5百円〉
- 松岡 省吾 〈2千円〉

—表紙写真解説—

■重文・三十三間堂通し矢(部分)六曲一隻
金地著色 逸翁美術館蔵
三十三間堂の全貌を横一文字に配した大胆な構図をとり、背景も蓮華王院の境内に限られている。初期の通し矢をあらわした貴重なもので、画風も土佐派による慶長後期の特色を示している。

謹賀新年

財団法人京都市文化観光資源保護財団

理事長 佐伯 勇



新しい年を迎え、皆様方のご健勝を心からお祝い申し上げます。

さて、お正月にも私達の先祖からまもり、伝えられてきた数多くの行事、習慣があります。今日でも、それぞれの家庭では新年をお雑煮やお節料理でお祝いし、また、門松などで飾りつけられた門口を、晴れ着姿で初詣に行きかう

風情などは、昔から伝わる日本的な行事、習慣であるといえましょう。

しかし、都市開発の進んだ都会などは、こうした風情というものがなかなか見られなくなり、辛うじて神社、仏閣の行事のなかに残されているに過ぎないように見うけられ、何か寂しい感じがいたします。

このような都会に住む人達は、お正月にこの日本らしさを味わい、心の安らぎを求めて、お正月を文字通り心のふる里京都で過ごそうと出かけられる人がかなり多くなったように聞いております。京都には、千有余年の長い間、日本の政治、文化などの中心地であったことから、昔からうけつがれてきた他ではみられない古い多くのしきたりや、ならわしがあり、町全体がいわゆる日本らしさを代表するふんいきを一際秘めていますので、これらの人達を満足させるのでしよう。

さいわいにも、京都にはこうした文化財等をまもるために、全国からのあたたかいご支援、ご協力により設立されました当財団があり、その目的事業も年々軌道にのってまいりましたことは誠に慶びにたえないところであります。私といたしましても、当財団設立当初より理事長をおひきうけし、この意義深い事業に携わってまいりましたことは大変光栄に存じるものであり、同時に今後におけるその責務の重要性を痛感いたす次第であります。

つきましては、皆様方におかれましても更に当財団の設立趣旨をご理解いただき、日本の宝「京都の文化財」をまもる国民運動が更に多くの方々のご支援、ご協力を得られますようお願いいたしますとともに、ますます当財団が発展いたしますよう祈念いたしまして私の新しい年を迎えてのごあいさつといたします。

「文化財紹介」

円山公園は音楽堂のすぐ南に、西行庵と呼ぶ鄙びた庵がある。歌僧西行が一時庵を結んだと伝えられる所で、西行を祀るささやかな草堂が残っている。その南方に一境を画して茶室皆如庵が、東向きに建っている。

この茶室は伝えによれば、宇喜多秀家の息女が久我大納言家へ興入の時、引出物として持参したものであるというが、確かなことはわからない。茶室はもと衣笠村の久我家の別荘にあって、久我家の諸大夫であった春日潜庵も、この茶室に幽居したことが伝えられている。久我家は、大名物の茶人「久我肩衝」を伝来した、茶の方でも知られた名家である。だが久我家の文書のなかにも、この茶室のことは今の処見いだされず、伝承の真偽を確かめることが出来ないのは残念である。

棟に赤木の鬼瓦をおいた切妻屋根の前面に、庇を付加して土間庇を形づくり、その左端に小縁を付して二枚障子の貴人口をあけ、その隣りに躰口をあけている。正面に躰口と貴人口が並び、しかも躰口が中央に位置している。躰口を中央に設けることは、織田有楽や小堀遠州らがよく試みていたが、それを貴人口と並べたのは古い遺構には例をみない。ここでは貴人口と連

子窓とすでにまとまりある構成を示しており、躰口は後補ではないかという疑いも抱かせるが、確かなことは言えない。案外武家好みの古制を残しているのかも知れない。別に腰掛もつくられてはいるが、貴人口の小縁は、ここでも中立ができるようにしつらえてある。

内部は四畳敷、但し客座と点前座の境に、中柱を立て仕切壁を付け、火灯口をあけて、いわ

ゆる道安囲を形成している。この構えは西翁院の澱看席にもみられた。江戸初期の茶書『草人木』には、この形式を指して「殊外面白座敷にて、其頃京の外迄もあまねく此座敷になりぬ」と記されていて、一時大変流行したらしいのである。この茶室もそうした気運のなかで造立されたのであろう。客座との間に仕切壁をもつこの構えは、点前座を次の間のように隔て、亭主が謙虚に茶を点てる姿勢をあらわしている。興入に持参する茶室として、それこそふ

さわしいものと考えられたのかも知れない。この席では、点前座の上が落天井とされ、一段とそのような心持が強調されているかに見える。炉は向切、勝手付の入隅に一重棚をつり、壁面に横長の下地窓をあけたところ、澱看席と変りない。

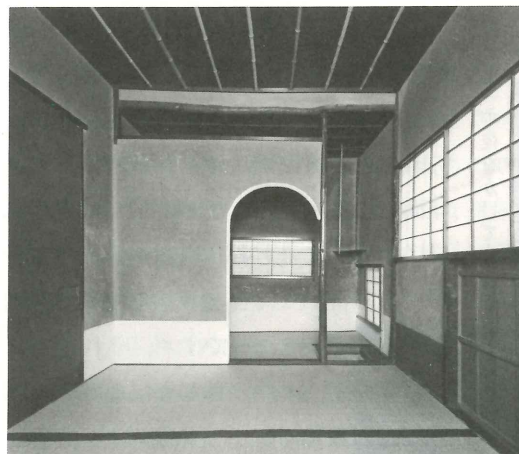
貴人口の正面に床が設けられている。板敷の框床で、入隅に柱を見せない塗廻し床とされ、

円山の皆如庵

京都工芸繊維大学教授
中村昌生



円山西行庵の皆如庵（昭和49年度
補助対象—半解体修理）



皆如庵 一道安囲一

そうした侘びた床構えの正面に円窓が切られている。床のなかの円窓は、高台寺の時雨亭にもみられるが、ここではそれが下地窓でなく裏側に障子がたてられ、勝手の灯がここに映る効果が考えられている。夜咄の茶のとき、この明りが茶室に風情をもたらすところから、この席は「夜咄の席」とも呼ばれるのである。この窓のために花入が掛けられないから、写真のように花釘を打った板を挟んでそれに花入を掛けることを工夫している。

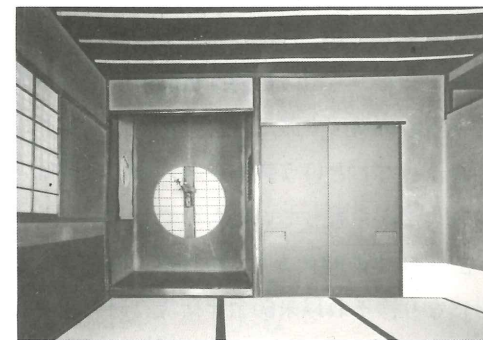
掛物は正面にかからないから左脇壁に掛物釘を打っている。それは照らす意味か、反対側の壁には墨蹟窓をあけている。だが床の意匠の主役はやはり円窓である。それも窓から望む景色でなく、窓そのものであった。

床の隣の給仕口は、火灯口の形式をとらず、襖引違いだての口としている。仕切壁に隔てられた三畳の客座は、躰口に貴人口、そして二枚襖の給仕口をそなえ、かなり開放的に構成されている。塗廻床や道安囲という侘びた形式を導入しながら、客座に寛ろぎとゆとりを与え、床に円窓をあけ風流な意匠をおり込んで、程よく

遊びの雰囲気をつくり出している。使い勝手の上からも、同じ道安囲とはいえ、澱看席とは格段と使いやすく働きのよい構成をもっている。こうした特色は、この茶室が、武家の息女の興入の引出物として考案されたものであるという伝えに、まことにふさわしいものといえよう。

皆如庵も一時傷みがはげしくなった。屋根はもとよりのこと、床が傾斜し、軸部の下半に捻れを生じたりしていた。未指定ではあるが全国の数寄者に知られたこの名席を亡してはならないと、故牧野宗翠女子が懸命に奔走され、この保護財団と府の文化財保護基金の補助を受け、今春悲願の修理を成就されたのである。今回は現状を改変しない方針で、折損した柱等は合成樹脂による補修を加えて古材の再利用をはかり、屋根は柿茸の軽快な姿に復し、可能な限り床や軸部の補修、強化を加え、根本修理を全体に及ぼすことは将来の解体修理を俟つことになった。それでも不自然な戸袋が除かれ久しぶりに瀟洒な外観が蘇えり、数寄者に喜ばれている。

京に残る二つの道安囲の古い遺構が、揃って修理成ったのも、たんなる偶然ではないかも知れない。 注）掲載写真は修理前のものです。



皆如庵 内部

シリーズまもる ⑬



「中夜をかけて高盛を作製」

京都北白川の

伝統行事、芸能の保存と伝承

北白川伝統文化保存会
会長 内田 福太郎

私は、若いころから昔ながらの我が古里のよさをまもり、育てることに努力をつづけ、高盛御供、鉄仙流白川踊、白川女風俗などの保存と伝承に努めています。

その中でも、高盛御供は最も歴史が古く、平安時代以前から伝わるもので、大昔から我々の氏神天神宮に御供する大切な行事で（現在は10月7日早朝におこなう）。昔は、氏子が三組に分かれ、それぞれ立派な御供を造ろうとする競争心が強くあって、各組の先輩も熱心な指導にあたり、また、三組の行列は沢山の氏子からの、「今年の御供は立派だった」とか「今年のはよくなかった」という声をきき、来年こそはといういきごみをもっていたものでした。

私も、18才の時代からこの行事に関係をもつことになり、それ以来60余年研究に研究を重ねてまいりました。

しかし、その間戦争の影響をうけ、難問題がかさなり、各組から私あてに、「とてもできないから何とか頼む」と申し出られ、とりあえず、私どもも有志により5年間この行事をおこないました。その後、氏子より「従来どおりやるから」という声が出てまいり、昔どおりの行事が復活することができたのですが、それもながつづきせず、また、私どもにたのみこまれ、再度数年間私どもも有志によって維持してきたものでした。そこで、このままの状態では伝統行事の伝承が危ぶまれると思い、現在の北白川伝統文化保存会を組織し、この保存と伝承に努めるようになったものであります。

しかし、保存会を結成し、人手が整うようになったと思えば、今度は高盛御供を準備するための家がなくこまりはてています。これも時代の流れで家の構造がかわり、また家族の皆さんの理解もうすれ適当な家をさがすことに、ひと苦労するのであります。また、材料についても、近年京都で必要な材料が出来なくなり、わざわざ大阪より取りよせねばならないむづかしい時代になったものです。

高盛の準備も、行事前日の朝から10数人により始められ、高盛の積みあげはその夜を通しておこない、早朝行列の準備をいたします。行列では、高盛を白川女の頭にのせて神社まで順行するためちょっとした技術が必要で、その白川女の選考も、これまたむづかしいことです。毎年、氏子の皆さんに「よかった」とほめられるまでの苦労は人知れぬ影の苦労がたくさんございます。

今ひとつの鉄仙流白川踊は、比叡山横川の学

僧の鉄仙が、当時の物語などを音譜にして里人と唄い踊ったのがはじまりと伝えられ、明治時代まで盛んにおこなわれ、毎年9月にはたくさんの人々が横川へあつまり夜通し踊ったものでした。しかしその後は、派手でにぎやかな江州音頭が盛んになるにつれて、昔のように盛んに鉄仙踊を踊る若者がなくなりました。

明治・大正のころはまだお年寄りの音頭とりが残っていたので、毎年夏になると、表に床机をだして夕涼がてら鉄仙音頭の練習をしていますと、その声をきいて近所の人や通りがかりの年寄りが踊って居ることがよくありました。しかし、若者はほとんど踊らない状態でありました。ところが、大正元年、私どもに対し、内務、文部両大臣から青年団設置に関する訓令がだされたので、私たち有志は相寄り青年団を組織し、自からの修養につとめると共に、昔ながらの古里のよさを育てようということになり、まず最初に



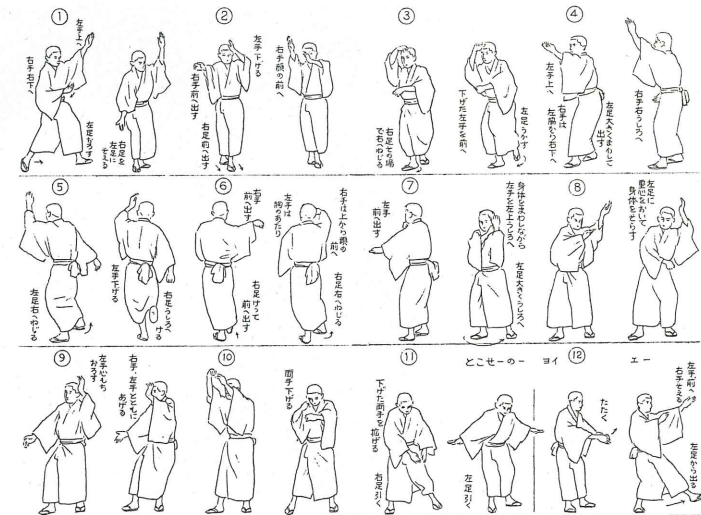
10月7日早朝白川女の頭に高盛をのせ北白川天神宮に奉納する

鉄仙踊を復活しようということで幹部が陣頭に立ってけいこを始めたのであります。私も踊りのけいこをすることになり、年寄りの女性でも、定評のある方々の踊り手についてけいこをし、音頭の節まわしもいろいろと研究しました。その時はさいわいにも若い娘たちも熱心にはげんでくれました。しかしその娘さんも現在のみな

75才以上になっています。

大正5年であったと思いますが、賀陽の宮様が鉄仙踊りを見せていただきたいとの申し出がありましたので、青年団はもとより村中の若いも若きも一体になって宮様を迎えたこの時が鉄仙踊の一番盛におこなった頃だと思います。

それから、今日まで60年になりますが、きびしい時の流れのなかに北白川に伝わる高盛御供をはじめ、鉄仙流白川踊を保存、育成することは本当にむづかしいことですが、毎年この伝統ある行事・芸能がとだえることのないよう努力しております。



鉄仙流白川踊 一図解一

会員だより



私の旅

遺跡を訪ねて

京都市伏見区深草 加藤 雅一

シルクロードに興味をもっている人は大へん多いが、私もそのひとりである。

私がシルクロードに興味をもったのは、中学生の時、歴史の授業で、法隆寺の金堂の柱に古代ギリシアの建築様式であるエンタシスの影響がある（このことは、古代ギリシア・ローマの文化が日本に伝わったルートと、仏教が日本に伝播したルートとが、ある地域からは同一であることを端的に表わしている）ということを知った時にはじまる。

近年、仏教芸術に大へん興味をもってきたことが重なって、日本古代文化の源流をさぐるといった意味から、シルクロード上の諸都市に仏跡を訪ねて見たいという気持ちが次第に強くなって来た。

以上のような内的動機につき動かされて、私は、昨年海外へ旅するようになった。

昨年は、中央アジア（いわゆる西トルキスタン地方）のシルクロードの都市である、サマルカンド、タシケント、ブハラなどを訪ねた。

ここでは、次のことがすぐ思い出される。それは、仏教発展史上画期的な、三蔵法師のインドへ仏典（原典）を求める旅も、チベット高原を横断することは不可能な

ので、シルクロードを西行して、このタシケント、サマルカンドを通り、今のアフガニスタンからインド入りした事実である。

このタシケント、サマルカンドなどウズベク共和国の諸都市には、8世紀から16世紀にわたる回教（イスラム教）文化の遺跡（廟、尖塔、回教寺院など）が数多く残っている。（仏教寺院はまったく見られなかった。しかし、サマルカンドやブハラでは、エンタシスの柱をもったパルテノン神殿風の遺跡があり、ここが東西文化の融合点であるという実感を強くもった。）

それらは、国家の手厚い保護のもとに順次修復されており、観光資源としても貴重な役割をはたしている。

連邦内の隣国であるタジク共和国にあるペンジケントの中世遺跡は、24万㎡という広大なものであり、主な発掘品は、レニングラードの博物館に展示されているということであったが、地元の博物館に残されているものだけでも相当なものであった。

さて、今年は、わが国への、仏教をはじめ、



サマルカンド 50.9 筆者撮影

あらゆる文化の最も太い中継点である隣国、韓国を訪れた。

韓国では、文化財保護に大へん力が入れられており、特にそれが観光政策（新しい観光資源としての）と結合されていることが私には印象的であった。（その代表例は韓国民俗村である。）

慶州を訪れて、新羅の古墳が、築造構造上（棺の上にふたかかえもある石を幾重にも積みあげ、その上に盛土をしてある。日本の古墳とは異なり、樹木は植えられていない）盗掘は不可能（盗掘者は、石が崩れて生きうめになる）なので、今日どの古墳を発掘しても、金の首飾、耳飾、装飾ベルト、勾玉などおびただしい副葬品がほとんど完全な形で発見されるということをはじめて知った。（「韓国美術五千年展」に出品されていたものなどは、そのごく一部分であることがわかり、そのスケールの雄大さに感銘をうけるとともに、現地訪問の重要性をあらためて認識させられた。）

それらの1つ天馬塚古墳（慶州の大陵苑という古墳公園の中にある）は、発掘後、古墳の中身の半分をくりぬき、内部が見られる（中に入れる）ように改造がほどこされ、しかもその内部が横断面にしてあるので、構造が大へんよくわかるようになっているのである。古墳の改造には異論もあるであろうが、私は、民族的な文化遺産は、けっして一部専門家のみのものであってはならないと信ずるものであり、この見事な発想には、敬服した。

韓国の寺院など、まだまだ紹介したいことがたくさんあるが、与えられた紙数がつきたので了としたい。（51.11.23）



慶州 大陵苑 51.8 筆者撮影



東京都府中市八幡町

田中正男

「古都の空がす火柱 平安神宮本殿炎上、はつ春。深く眠る古都の空に、不気味な炎が噴きあげた。朱塗りの社殿を怪しく照らして、火の粉が黒いかわらの町並みに落ちる。6日未明。京都・平安神宮炎上。しかも「放火の疑い」とは一。古い神社仏閣の多い京都では、明治年間の創建はまだ新参格。が、修学旅行に結婚式に、と全国から親しまれてきた平安神宮。「惜しゅうおすなあ」と、古都の住民は嘆いている。

（以下省略、51.1.6 朝日新聞夕刊）

非常に生々しく報道されていますが、正にこの通りであったと思います。東京で、平安神宮本殿炎上のニュースを聞いたとき、「残念だ、惜しいことをした」と感じたように記憶しています。記念撮影の背景に写っている大極殿や応天門は焼失を免れたようで、不幸中の幸いであったと思われます。

京都には、名所旧跡が沢山ありますが、その

なかでも、平安神宮は市内でも指折りの、観光客の多いところ。色彩鮮かな、壮麗な社殿—応天門や大極殿—によって、平安京創建当時の盛観をしのぶことができるからです。神苑は回遊式の庭園で、近年名勝の指定を受けましたが、それは、明治時代の代表的庭園であると評価されたためだと思われます。わたくしも、この辺は好きところで、何回も訪れています。庭園も社殿も是非とも後世に遺したいものです。

つぎに、京都を旅行して感じたことを述べたいと思います。新幹線の開通以来、東京と京都は時間的には、非常に短縮され、約6時間で往復できるようになりました。日帰り旅行もできるようになりましたが、やはり、一泊ぐらいはして、ゆっくりと古都の情緒を味わいたくなります。

祇園祭や春のお花見、秋の紅葉狩など時期がきまっているものは、止むを得ませんが、いわゆる観光シーズン中の旅行は見合わせた方がよいと思います。11月23、24日の両日嵯峨野と大原を訪れたところ、交通機関は混雑し、どこへ行っても観光客で賑わい、大幅な計画の変更を余儀なくされたことがあります。

翌月になって、大原を尋ねれば、観光客は少なく、時間をかけてゆっくりと、貴重な文化財を拝観できました。正しく、三千院のお坊さんが申しました通りで、よい経験をしました。地方の方が京都の文化財拝観に際して何かの参考になれば幸いです。



平安神宮境内 筆者撮影

保護財団の活動

ふる里への郷愁をかきたて

「郷土芸能の夕」を楽しむ！

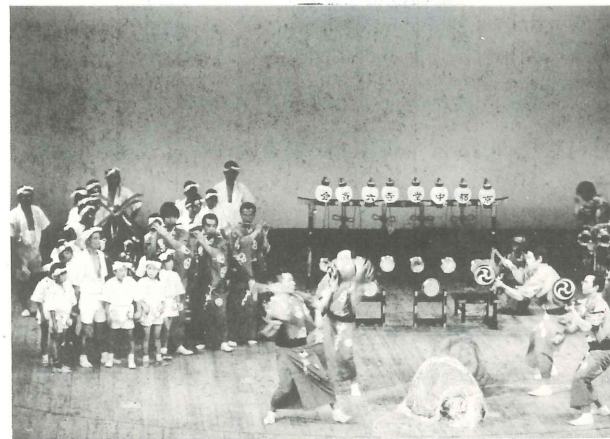
祭や行事などと深く結びつき、京の庶民の生活の中に息づいて今日に伝承されてきた郷土芸能のよさを紹介する「郷土芸能の夕」(主催、京都市・京都市文化観光資源保護財団)を去る10月30日(土)午後6時半から、京都会館第2ホール(京都市左京区岡崎)において開催した。

今回は、京の三大念仏狂言を一堂に会しての初企画とあって会場は、外人観光客をはじめ、お年寄り、家族づれを混えて満席。プログラムは、演劇塾長田学舎主宰 長田純先生の構成、演出で、壬生狂言を皮切りに、あいらす児童合唱団の「京のわらべうた」、千本えんま堂狂言、演劇塾長田学舎の「町かどの芸能」、嵯峨狂言、中堂寺六斎念仏踊と息をつく間もなく次々と舞台上に登場し、また、京都中堂寺住吉神社の子ども神輿の特別出演も舞台に色をそえて、会場い

っぱいに、ふる里への郷愁をかきたて盛況のうちに終わった。

また、会場には、親善バレーボールのため入浴されていた、京都市の友好都市である西安市の友好代表団並びに西安市女子バレーボールチームの皆さんがご来場になられ、2時間にわたってくりひろげられた郷土芸能、わらべうた等の「京都人の心」にうっとり、終始拍手がおくられていた。

郷土芸能のよさを舞台いっぱいにくりひろげる



第14回文化財特別参観

「西本願寺」と数内流家元

「燕庵」盛況のうちに終る！

去る10月9日(土)、あいにくの小雨の降るなかで文化財特別参観を実施したが、参加者も前回は上まわる盛況ぶり。

西本願寺虎溪の庭、燕庵庭園の苔も、雨がさいわいしてか文化財の見学会に色をそえ見学者は詳しい案内の説明に耳をかたむけ、質問もたえないほどであった。

この特別参観も回を重ねるごとに、参加者も増え、本事業に対する期待も大きくなってまいりました。つきましては、本事業を更に充実したものにするため皆様方のご意見、ご希望をお寄せ下さい。おまちしております。

第16回文化財特別参観のご案内

—大徳寺塔頭の「黄梅院」と

「徳禅寺」—

今回は、禅寺における伽藍と塔頭の景観が今日もなおかつての姿をよくとどめている大徳寺山内の中から、中世末より近世初頭にいたる貴重な文化財を保存している黄梅院と徳禅寺の文化財の見学をおこないます。

◇参観日時 昭和52年3月5日(土)午後2時
(参観時間2時間)

◇対象者 財団募金協力者(会員)とその家族

◇申込方法 往復はがき1人1枚に住所、氏名、年令を記入

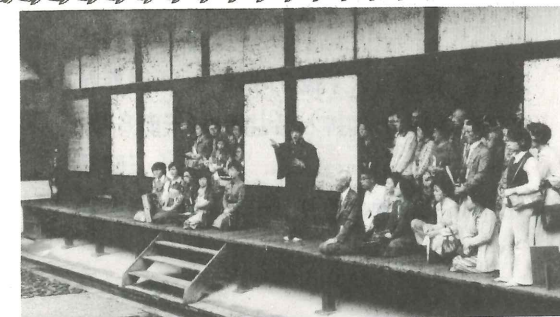
◇申込先 〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町13
京都市左京区岡崎 京都会館内
京都市文化観光資源保護財団宛

※参加費不用

お問い合わせは、当財団事務局まで

(電話 075-771-6051)

なお、人数に制限がありますので、先着順により締切らせていただきます。(先着50名まで)



詳しい説明に耳をかたむけ文化財を見学



◎財団法人京都市

◎財団法人京都市文化財研究所設立

業務を開始

このたび、京都市域の埋蔵文化財の調査、研究に寄与することを目的として、去る10月25日、財団法人京都市埋蔵文化財研究所（理事長 村田治郎）が発足し、11月1日よりその業務を開始した。

これまで、京都市域内の埋蔵文化財の発掘調査は、いくつかの任意団体により、発掘調査の本化が計られることになり、今後の調査研究の活役に大きな期待が寄せられている。

なお、開発行為にともなう発掘調査の事前打ち合わせは、従来どおり市文化観光局文化財保護課においておこなっている。

編集後記



- ◇ 新年あけましておめでとうございます。旧年中は、皆様方のあたたかいご支援、ご協力を賜わりありがとうございました。事務局一同、昨年以上に文化財保護の推進に努めますので、本年もあいかわらぬ皆様方のご指導、ご鞭撻を賜わりますようお願い申し上げます。
- ◇ 寒い冬をむかえると、きまつて火の利用が多くなり、京都の町も時折の消防車のサイレンに騒がしくなりますが、私たちの仕事から、文化財包蔵地域での火災の発生には特に気もめます。
- 皆様も、これから火を使用される機会が多くなるとは思いますが、火の取り扱いには十分ご注意ください。また、文化財を火災からまもるためにも、文化財周辺での喫煙はつつしむようお願いいたします。

—京の年中行事より—（1月～3月）

1月1日	歳旦祭	市内各社寺
4日	蹴鞠始め（午後1時）	下鴨神社
10日	十日ゑびす（午後2時）	ゑびす神社
14日	裸踊り（午後7時）	法界寺
15日	柳のお加持と弓引始め（午前8時）	三十三間堂
15日	七福神めぐり（午前7時）	泉涌寺

2月2日～4日	節分会	市内各社寺
23日	五大力尊仁王会（午前10時）	醍醐寺
24日	さんやれ祭（正午）	上賀茂神社
25日	梅花祭（午前10時）	北野天満宮
3月14日～16日	東福寺涅槃会（午前9時）	東福寺
	泉涌寺涅槃会（午前8時）	泉涌寺
15日	涅槃会・お松明式	清涼寺

（都合により、行事日時変更の場合がありますのでご了承下さい。）